

## 経済と政治との関連の問題（十二）

——いわゆる「トロツキズム」の性格規定——

山 本 二 三 丸

### 三十

トロツキは、その自伝『わが生涯』の第十五章「裁判、流刑、脱走」の冒頭において、一九〇五年十二月逮捕されたあとのことをつぎのように記している。

「わたしの牢獄時代の第二周期がはじまった。それは、最初のものよりずっとたえやすかったし、また諸条件も八年前のそれとは比較にならぬほどずっとがまんできるものであった。わたしは短期間「クレステイ」の監獄にいて、それからペテロ・パヴロフスクの城塞に、そして最後に予備拘留所に入れられた。われわれは、シベリアに移されるまえに、さらに移送監獄に移された。

それらをあわせて、わたしは監獄に十五ヵ月入っていた。各監獄は、それぞれ独特の特徴をもっていて、ひとはそれに自分を適応させなければならなかった。というのは、いくらちがっていても、牢獄は実際にすべて同じものだから。

らである。ふたたびわたしは、科学と文学の系統的研究の時期に入った。わたしは、地代の理論とロシアの社会関係の歴史の研究をはじめた。地代にかんする大きな労作は、まだ未完成であったが、十月革命ののちの最初の数年のうちに失われた。それは、わたしにとって、フリー・メーソンにかんする研究の損失について、もっともいたましい損失であった。ロシア社会史の研究は、『革命の結果と展望』という論文になったが、これは当時においては、永続革命の理論を立証するもっとも完成された記述となっていた」(ibid., p. 187)。

ごらんのように、トロツキーは、監獄のなかでも「科学と文学の系統的研究」をやり、とくに、「地代の理論」については、「大きな労作」を未完成ながら書きあげていた、と得々として述べている。だが、「地代の理論」とは、いったい、なにか？ 科学的な地代理論は、いったい、誰が、その基礎をしっかりとききあげたのか？ といえば、それは、いうまでもなく、『資本論』第三卷第六篇「超過利潤の地代への転形」のなかに述べられているものであり、マルクスがはじめてこれを科学的に、十分な形でききあげたのである。マルクスは第三卷第六篇のなかで、第三十七章から第四十六章まで、十章をもって、資本制的地代の二つの基本形態——差額地代と絶対地代——を説明すると同時に、さらに第四十七章「資本制的地代の發生史」を加え、そのなかで封建地代から資本制的地代への歴史的な過渡的諸形態について、詳細な説明をおこなっている。資本制的地代といい、歴史的な過渡的地代形態といい、これらについての基本的な理論的説明は、マルクスによって、『資本論』第三卷第六篇のなかで、あますところなくほとんど完全なまでにおこなわれているのである。それゆえ、たとえば、レーニンが、ロシア革命におけるロシア社会民主党の農業綱領をつくりあげるさい、とくに土地革命の問題について、つねに『資本論』第三卷第六篇のなかの説明を根拠としてその課題を首尾よくやりとげているのは、まことに当をえたものというべきなのである。ところで、

ことさらに自伝のなかで、「地代の理論」を研究し、これにかんして「大部の労作」を未完成ながらつくりあげたと書きたてている当のトロツキーは、いったい、『資本論』第三巻を読んだことがあるだろうか？

すでに本論稿の(一)のなかで引用したところによっても明らかのように、彼トロツキーは、『資本論』を読みはじめて第二巻のところでやめてしまったと、告白している。(註)  
つまり、『資本論』第三巻は眼を通したこともなく、したがって、その第六篇の内容がどんなものかということすら、まったく知らないのである。『資本論』を読みはじめて第二巻で中止してしまうような読書家が、その読んだはずの第一巻と第二巻の内容について、すこしでもまともな理解がまったく得られるものでないことは、いまだ改めて言うまでもないところである。そのうえ、第一巻と第二巻を一度かじっただけの者が、いったい、どうして、第三巻第六篇の中の「地代の理論」について、ほんのすこしでも知識をもつことができるであろうか？  
トロツキーは、右にみたように、最初の流刑の時期に書きあげた「フリー・メーソンにかんする研究」の草稿をどこかに紛失してしまい、第二回目の牢獄時代につくりあげた「地代の理論にかんする大部の労作」を、未完ながら、同じく紛失してしまい、こうした両労作の紛失が彼自身にとって「もっともいたましい損失」であつたと、書きたてている。だが、もし、これら両労作が首尾よく「紛失」してしまふことなく、現存して日の目を見ることができるとしたならば、いったい、どういうことになるであろうか？  
『資本論』を第二巻まで読みかけて放り出してしまったような手合が、「地代の理論」にかんする大部の労作を物したというだけで、その内容は推して知るべし、である。もし、研究の結果として書きあげたものが実際にあつたとして、それが「紛失」したというのであれば、彼トロツキーは、神の恵みの広大なことに深く感謝してしかるべきであろう。なぜならば、第三巻第六篇をともに読んだことのない「研究者」のつくりあげる「地代の理論」など、大部で

あればあるだけ、その内容は慘憺たるものとならざるをえない。その内容が公けにされれば、マルクス主義理論家という、トロツキーの虚名は一举につぶれてしまうであろう。おそらく、もっとも真実に近いとおもわれるのは、彼トロツキーが、「地代の理論」など全然研究の研の字もこころみなかったが、このさい、「地代の理論」という、經濟理論のうちでもっとも高度・複雑な理論について大部の研究論文を作製したというひとつの「記事」を、例によって自家宣伝上もっとも効果的と判断したものである、ということである。こうした推量を決定的に裏づけるものは、彼が終始一貫、農民問題を完全にその視野の外においており、したがって農民運動の意義をほとんどまったく認めなかったという、動かすことのできない歴史的事実である。この農民問題をまったく眼中におかなかった「大人物」の「見地」なるものについてはすぐあとでふれることにしよう。

（124） 本誌第二十四卷第四号、三五—三六ページ参照。

（125） 本論稿（一）にかかげたのは、邦訳書の該当部分であるが、さきに本論稿（四）のなかの注（40）に記しておいたように、邦訳は相当にひどいものであるで、この箇所を改めてつぎに訳出しておこう。

「……レーニン、耳を傾けて聴くすべを知っていた。

「そして君は、理論の問題ではどうやっていたかね？」

わたしは、レーニンに、モスクワの移送監獄にいたとき、われわれがグループで、彼の著書『ロシアにおける資本主義の発展』をいかに研究したかということ、そして、流刑地でわれわれがマルクスの『資本論』をいかに勉強したかということ、しかし、第二巻で止めた、ということ話を話した」（Ibid., p. 143）。

ところで、問題は、ありもしない「地代の理論にかんする研究」ではなく、まさに、「ロシア社会史の研究」に、とりわけその「成果」を示すものとしての労作、『革命の結果と展望』にこそある。こんにち、この小論の原典

を入手することはほとんど不可能であり、われわれの見ることできるのは英訳本にかぎられているが、この英訳本はおそらく原典を忠実に翻譯したものと考えられるので、当面、この英訳本によって、その内容をうかがうことにしよう。ここに用いられる英訳本は、一九六九年ニューヨークの Merit Publishers から発行された“Leon Trotsky: The Permanent Revolution and Results and Prospects”であるが、本文の検討に入るまえに、この英訳本のはじめにかかげられている「訳者覚書」の前半部分を、参考までに訳出しておめにかげよう。

『永続革命論』は、一九三〇年にロシア語で、ベルリンから出版された。一英訳書が一九三一年、ニューヨークであらわれた。ここにある翻訳は、亡くなった John G. Wright によっておこなわれ、Brian Pearce によって改訂された。

『結果と展望』は、一九〇六年にセント・ペテルブルグで出版された。一英訳書が一九二二年にモスクワで（『一概観と若干の見通し』という表題をつけて）出版されたが、これには、著者が一九一九年のロシア版のために書いた特別の序文がふくまれていた。ここにある翻訳は、原典から Brian Pearce によっておこなわれた」（ibid., p. 25）。

われわれは、右の「訳者ノート」のなかに記されている著者の「特別の序文」によって、労作『結果と展望』にたいする著者自身の基本的考え方を、まずとらえておくことにしよう（……は中略部分を示す）。

「一九一九年モスクワで再版された本書への序文

ロシア革命の性格という問題は、それに関連してロシア革命運動のさまざまな思想傾向と政治的諸組織がそれぞれグループをつつたところの、基本的問題であった。社会民主主義運動そのものの内部においてさえ、この問題は、諸事件がそれを実践的な性格をあたえた深刻な不一致をひきおこした。一九〇四年からあと、この相違は、メンシェヴィズムとボリシェヴィズムという、二つの基本的な傾向の形をとった。メンシェヴィキの見地は、わが国の革命はブルジョア革命である、いいかえれば、その当然の結果はブルジョアジーへの権力の移行とブルジョア議会政治のための諸条件を創りだすことである、というのであった。

ポリシェヴィキの見地は、きたるべき革命のブルジョア的性格の不可避免性を認める一方、革命の任務としてプロレタリアートと農民の独裁による民主共和国の創設を提出した。

メンシェヴィキの社会的分析は、きわめて皮相であり、本質的には、粗雑な歴史的類推——「教育ある」俗物たちの典型的な方法——におちいつていた。ロシア資本主義の発展が、その両極に激烈な矛盾をつくりだし、ブルジョア民主主義の役割をますます無意味なものにおしきげつつあるという事実も、つぎつぎに発生する諸事件の経験も、メンシェヴィキが「真実の」、「現実の」民主主義をうむことなく探しだすことをひかえさせなかった。その「真実の」、「現実の」民主主義というのは、「国民」の先頭に立って、議會制的で資本主義的發展のためにできるだけ民主主義的な諸条件をつくりだすはずであった。メンシェヴィキは、いつでもどこでも、ブルジョア民主主義の發展の徴候を見いだそうとして努力し、それを見いだすことができないところではそれを發明しさえした。かれらは、すべての「民主主義的な」宣言とデモンストレーションの重要性を誇張し、同時に、プロレタリアートの力とプロレタリアートの闘争の展望を過少評価した。かれらは、歴史の法則によって要請されているとされたロシア革命の「正統的な」ブルジョア的性格を保証するために、この指導的なブルジョア民主主義派を見いだそうとしてみても、熱狂的な努力をはらったのであって、そのために、革命そのものの過程で指導的なブルジョア民主主義派を見いだすことができなかったとき、メンシェヴィキが自身でそれらの任務を遂行することをひきうけ、多かれすくなかれ成功をおさめたのである。

どんな社会主義的イデオロギーもまた、どんなマルクス主義的な階級的用意もまた、小ブルジョアの民主主義派は、もちろん、ロシア革命の諸条件のもとでは、メンシェヴィキが二月革命においてその「指導的」政党の役割においてはしたのとちがったように行動することはできなかった。ブルジョア民主主義のためにはどんな重大な社会的基礎も存在しないということが、メンシェヴィキ自身にたいしてあきらかにされた。というのは、かれらはじきに役に立たなくなり、革命の第八ヵ月目には階級闘争によってわきに投げだされてしまったからである。

ポリシェヴィズムは、これと反対に、ロシアにおける革命的ブルジョア民主主義の力と強さにたいしてけつして信用していなかった。そもそものはじめから、ポリシェヴィズムは、きたるべき革命にとつての労働者階級の決定的な重要性を認識していた。しかし、革命の綱領そのものにかんしては、ポリシェヴィキは、さしあたり、それを何百万の農民の利益にかぎった。それは、かれらなしには、あるいはかれらに対抗しては、革命はプロレタリアートによって最後までおしすすめられることができなかったからである、このことから、（当然のあいだ）革命のブルジョア民主主義的性格についてのかれらの認識が生じたのである。

その当時、著者は、革命の内的な諸力の評価とその展望にかんしては、ロシアの主要な傾向のどちらにもくつついていなかった。当時、著者が支持していた見地は、つぎのように要約することができる。その最初の課題にかんして一ブルジョア革命としてはじめられた革命は、まもなく強力な階級闘争をよびおこし、被抑圧大衆の先頭に立つことのできる唯一の階級、つまりプロレタリアートの手に権力が移行することによってのみ、最終的な勝利をうるであろう。一度権力を握ったプロレタリアートは、それ自身ブルジョア民主主義的綱領にそれ自身をかざることを欲しないばかりでなく、またそうすることもできないであろう。それは、ロシア革命がヨーロッパ・プロレタリアートの革命に転化される場合にのみ、革命をその目標にむかつておしすすめることができるであろう。そのとき、革命のブルジョア民主主義的筋書は、その国民的限界とともにとりぞかれ、ロシア労働者階級の一時的な政治的支配は、長期的な社会主義的独裁へと発展するであろう。しかし、ヨーロッパが無力のままとどまるなら、ブルジョアの反革命は、ロシアにおける勤労大衆の政府を許さないであろうし、国家を後方へ、民主主義的な労働者農民の共和国よりもはるか後方へ投げかえすであろう。それゆえ、いったん権力をにぎったならば、プロレタリアートは、ブルジョア民主主義の限界内にとどまることはできない。それは、永続革命の戦術を採用しなければならない。つまり、それは、社会民主党の最大限綱領と最小限綱領とのあいだの柵をうちこわし、たえずますます根本的な社会革命をやり、西ヨーロッパにおける革命のうちに直接かつ緊急の支持をもとめなければならない。以上のような立場が、一九〇四—一九〇六年に最初に書かれているここに再版される本書において、展開され論じられている。

十五年の期間にわたって永続革命の見地を維持しつづけてきたが、それにもかかわらず、著者は、社会民主主義運動内の相争う二つの党派にたいする評価で誤りにおちいった。著者は、ボリシェヴィキとメンシェヴィキの両者とも、ブルジョア革命の見地から出発しているものであるから、かれらのあいだによこたわる相違は、分裂を正当化しうるほど深刻なものではない、と考えていた。同時に著者は、諸事件のいっそうの経過が、一方では、ロシアのブルジョア民主主義の弱さと無意味さをあきらかに立証するであろうし、他方では、プロレタリアートがそれ自身民主主義的綱領に限定することが客観的に不可能となることを証明するであろうと希望していた。そして、わたしは、このことが党派の相違の基盤をとりのぞいてしまうであろうと考えたのである。

亡命の期間のあいだ、著者は、この二つの党派の外側に立っていたので、ボリシェヴィキとメンシェヴィキとのあいだの不一致の線にそって、現実には、一方の側に、不屈の革命家たちが集まり、他方の側に、たえずますます日和見主義的になり調和主義

的になっていく諸分子が集まっていたという、きわめて重要な状況を十分に評価しなかった。一九一七年の革命が勃発したとき、ポリシェヴィキ党は、先進的な労働者と革命的インテリゲンツィアの最良の部分を集結した、強力な中央集権化された組織をもつていて、若干の内部的闘争ののち、國際的情勢全体とロシアにおける階級関係とに完全に合致した、労働者階級の社会主義的独裁をめざす戦術を率直に採用した。メンシェヴィキ派については、それは、上述したように、この時までに、ブルジョア民主主義の諸任務を引き上げることができまるまでに成熟していた。

現在、この書の再版を公けにすることによって、著者は、多くの年月のあいだポリシェヴィキ党の外部にいた自分自身と仲間たちが、一九一七年のはじめにあたつて、ポリシェヴィキ党の運命に自身の運命を結びつけることを可能にした理論的諸原則を説明することを欲するばかりでなく（このような個人的理由は、この書の再版にとつての十分な理由とはなるまい）、また、プロレタリア独裁が既成の事実となるずっと前に、労働者階級による政治権力の掌握がロシア革命の任務でありえし、またそうあらねばならないという結論がそこから導きだされたところの、ロシア革命の原動力についての社会的・歴史的分析を呼びもどしたいと思う。一九〇六年に書かれ、その基本的な構想がすでに一九〇四年に形成されていたこの小著を、現在変更をくわえることなくたびたび出版するという事実は、マルクス主義理論が、ブルジョア民主主義の代理者であるメンシェヴィキの側にあるのではなく、労働者階級の独裁を實際に推進している党の側にあることの完全な証拠である。

理論の最終的な検証は、経験である。われわれがマルクス主義理論を正確に適用したということを示す、論駁しがたい証拠は、われわれが現在関与している諸事件が、そして、それらへのわれわれの関与の仕方そのもののさえもが、基本的な点ではすでに十五年ほど前に予見されていたという事実によつて与えられている。

マルクスの弟子であるわれわれは、ドイツの労働者とともに、革命の春は社会的自然の諸法則に完全に一致して、そしてまた同時にマルクス主義理論の諸法則に一致して到来したのだという、われわれの確信をまもる。なぜなら、マルクス主義は、歴史を超越した学校教師の指針ではなく、現実に進行しつつある歴史的過程の道と方法についての社会的分析であるからである。

わたしは、二つの著作——一九〇六年と一九一五年との——をいかなる変更もくわえずに出版する。もともとわたしは、原著に若干の注をつけて、これを時勢にあつたものにするつもりでいた。しかし、原著を通読してみて、わたしは、この意図を断念しなければならなかった。もしわたしが細部にまで立ちいろうとすれば、この書物の大きさを倍にしなければならなかったであ



ろう。しかし、そのためには今のところ時間がないし、そしてそのうえ、そのような「二階建」の本は、読者にとってけつして便利とはいえないであらう。そして、より重要なことだが、わたしは、この思想のつながりがその主要な分脈において、現在の諸条件にひじょうによく接近しているし、この本をより完全に理解しようと欲する読者は、現在の革命の経験からとりだされた必要な材料をもって、この本の説明を補足することが容易にできるであらう、と考えるのである。

一九一九年三月十二日 クレムリンにて

L・トロツキー 「Ibid., pp. 29—35. 傍点—トロツキー」。

一九〇六年に書いたパンフレットを、一九一七年十月革命後一年半もたつてから、ことさらに再発行することをあえてした彼トロツキーが、この再版につけた「序文」なるものの内容を、どうかとくところないいただきたい。いったい、ここに示されているのは、どういうものであらうか？ 一九〇五—一九〇七年のロシア第一次革命にかんしては、すでにこれまで詳細に検討してきたレーニンの名著『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』およびその他の数々の労作が発表されていて、いやしくもボリシェヴィキ党のなかで重要な指導的地位を占めるほどの人物ならば、すべてこれらの労作は頭の中にはいつているはずである。のみならず、一九〇五—一九〇七年の第一次革命の現実の経過そのものが動かすことのできない事実として眼の前にあり、第一次革命以前およびその最中においてつくりあげられた革命闘争にかんする方針または見解なるものも、これらの事実によつてすでにその当否は明確に判定されなくてはである。もし、その著者がボリシェヴィキ党の誠実な指導的メンバーであるならば、一九〇五—一九〇七年第一次革命にかんする旧著をば右のレーニンの『二つの戦術』その他と照らしあわせて、その間の根本的相違を徹底的にとりのぞく努力をしたはずであり、また、第一次革命の歴史的経過そのものの事実によつて、旧著の内容を十二分に吟味しおえているはずである。では、ここに示された内容はどうかといえば、それは、まさに徹頭徹尾—はじめからおわりまで—レーニンのかかげた明確な戦術と真つ向うから対立するものであり、メンシェヴィキ—新イスク

ラ派の見地をきわめて陰險な形にぬりかえただけのものばかりである。そのうえ、例によって歴史的事実の歪曲と捏造がいたるところで勝手気ままにおこなわれている。レーニンを傷つけ、ボリシェヴィキに泥をなすりつけることによって、どこまでも「トゥーシノの渡り者」の立場を「合理化」しようとする鉄面皮、悪辣さと狡智のほどは、まことにおどろくべきものといわなければならない。だが、見方をかえてみれば、ここには、彼トロツキーの智慧のありつたが、彼の脳中にある「見地」と称するもの、「理論」と称するもの、そして煽動政治屋としての必要かつ十分な手法のすべての精華が、百花繚乱と咲きほこっており、その意味において、いわゆる「トロツキズム」のすべてがここにもれなく開陳されてある、といつてよい。そこでつぎに、その精華のほどを、ざっと鑑賞することにしよう。

一 まず、「ロシア革命の性格 Character」がもつとも基本的な問題であり、それをめぐって「ロシア革命運動のさまざまな思想傾向と政治的組織」が形成され、そこに「メンシェヴィキとボリシェヴィキ」との対立が生ずる根拠があった、と書いているのは、まったくでたらめであり、きわめて悪質なメンシェヴィキ弁護論である。「革命の性格」といえば、それがどういう性格の革命であるか、たとえば、ブルジョア民主主義革命であるか、それともプロレタリア社会主義革命であるか、といったようなことが、基本問題となっているものである。ところで、トロツキー自身、右の序文の最初のパラグラフで、「メンシェヴィキの見地」をば「わが国の革命はブルジョア革命である」とするものと述べ、「ボリシェヴィキの見地」をば同じく「きたるべき革命のブルジョア的性格の不可避性を認める」とものと言っている。つまり、メンシェヴィキもボリシェヴィキもともに当面の革命の性格をブルジョア民主主義革命と規定している、とトロツキー自身明記している。これでは、いったい、どこに「革命の性格」についての両者の根本的相違があるというのか？ しかも、彼トロツキーは、同じ「序文」のなかで、さきに行つて、「著者は、ボリシェヴィキとメンシェ

ヴィキの両者とも、ブルジョア革命の見地から出発しているのであるから、彼らのあいだに横たわる相違は、分裂を正当化しうるほど深刻なものではない、と考えていた」と、はっきり述べたてているではないか。同じ「序文」のなかで、しかもわずかに二、三ページの間に於いて、この著者は、一方では、「ロシア革命の性格」という問題がきわめて重大な根本問題であつて、これについての見解の相違からメンシェヴィズムとボリシェヴィズムという二つの対立する基本的な傾向が生まれたと明記しながら、他方では、メンシェヴィキもボリシェヴィキも当面の革命の性格をまったく同じ「ブルジョア革命」とする見地に立っているがゆえに、これら両者の分裂に對立はまったく重大なものとは考えられない、と述べている。このまぎれもない自家撞著に当の本人がまったく気づくことなく、筆のおもむくままに論をはこんでいるという事実は、いったい、どのように説明することができるであらうか？

二 「メンシェヴィキの見地」についての説明も、ほとんどその全部が事実とは関係のない全くのたわごとか、空文句の羅列ばかりである。

(イ) 「メンシェヴィキの社会的分析がきわめて皮相であり、本質的には、粗雑な歴史的類推におちいつていた」というのは、まったくでたらめである。メンシェヴィキは社会的分析などしておらず、「歴史的類推」などしようもなかったのである。

(ロ) 「メンシェヴィキが『本物の』民主主義を探し出すことに努力した」とか、「ブルジョア民主主義の発展の徴候を見いだそうとして努力した」とか述べたてているのは、いずれも事実を完全に歪めたうそばかりである。実際には、彼らメンシェヴィキは、政治的舞台に、しかも「一月九日の前夜に」おいてさえ、たった二つの能動的勢力を、すなわち、政府とブルジョア民主主義派を、しかもこの二つしか見いださなかったのである。そして、それゆえにこそ、メンシェヴィ

イキは、ブルジョア民主主義派が「革命の事業から尻ごみし、それによって革命の展開力を弱めることになる」ことのないように、「革命時に最左翼の革命的反政府党」にとどまることを強く主張していたのではないか!? そもそも、トロツキーは、メンシェヴィキ―新イスクラ派を側面からたえず援護し、賞讃し、ポリシェヴィキにたいして終始攻撃を加えることに最大の努力を傾けてきた有力誌『オスヴォボジデーニエ』と、これを中心として集まっていたブルジョア民主主義派の連中のことを、とりわけ、かの名士、ベ・ペ・ストルーヴェのことを、すっかり忘れてしまったとでも言うのであろうか!? れっきとしたブルジョア民主主義派が存在しており、しかもそれがいつでも影になり日向になりしてメンシェヴィキの援護につとめ、ときにはストルーヴェが積極的に共同戦線をはってポリシェヴィキ攻撃に力をつくしたという周知の歴史的事実をすっかり塗りつぶして、メンシェヴィキが「本物の」民主主義派を探しだすべく努力したとか、「指導的なブルジョア民主主義派を見出すことができなかったので、メンシェヴィキ自身が、その任務の遂行をひきうけて、多少とも成功することができた」とか、よくもまあ、空々しくも、まかせを並べたてることができたものである!!

(イ) メンシェヴィキが「すべての「民主主義的な」宣言やデモンストレーションの重要性を誇張した」というのも、まったくのでたらめであり、事実をいつわるものである。事実、メンシェヴィキは、「共和制」についても「臨時革命政府」についても、その緊要性どころか、ほとんどこれにふれることをしていない。精々のところ、「憲法制定議會を召集する」ということをうたっているだけである。これでは、「すべての「民主主義的な」宣言」などというりっぱな表現が泣こうというものである。また、「デモンストレーションの重要性を誇張した」とは、いったい、誰のことを言っているのか!? すでにこれまでの考察によって明白に示されているように、メンシェヴィキが「より高度の型のデモンストレ

ーション」として極力推奨している「唯一の、重要なデモンストレーション」とは、「ゼムストヴォ議員の前で演説することである。この種の「デモンストレーション」を意識的にゆがめて一般的な意味でのデモンストレーションにすりかえ、当のメンシェヴィキがデモンストレーションの重要性を誇張したのだと書きたてているとすれば、これほど悪質で陰險なメンシェヴィキ弁護はないであろう。

三 ポリシェヴィキについての説明も、右におとらず、全文ことごとくでたらめであり、臆面もない事実の歪曲と捏造である。

(4) まず、ポリシェヴィキが「ロシアにおける革命的ブルジョア民主主義の力と強さにたいして信用していなかった」というのは、事実を完全に歪めたことじつであり、きわめて悪質な改ざんでしかない。ほんの一例として、さきにレーニンの労作『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』を検討したさいにとりあげたつぎの個所をもう一度読みかえしてみがいい。

「ブルジョア社会を基盤として行動している社会民主党は、あれこれの個々の場合に、ブルジョア民主主義派と肩をならべてすすむことなしには、政治に参加することはできない。その場合、われわれと諸君との相違は、われわれが融合することなく肩をならべてすすむ相手は革命的・共和主義的ブルジョアジーであるが、諸君がやはり融合することなく肩をならべてすすむ相手は自由主義的・君主主義的ブルジョアジーだという点にある。事情はまさにこういうふうなのだ」(本論稿(九)、本誌第二十六巻第四号、四七ページ参照、傍点—レーニン、ゴシツク体—山本)。

「革命的・共和主義的ブルジョア民主主義派」の基本をなしているのは、ほかでもない、プロレタリアートとならんで「人民」を構成する、農民である。レーニンは、革命的ブルジョア民主主義派と肩をならべてすすまなければ、

政治に参加することができない、と確言しているのである。どうして、ポリシェヴィキが「革命的ブルジョア民主主義派の力と強さをけつして信用しなかった」などと言えるのか!? 同じように、前稿で引用したレーニンのつぎの積極的主張も、トロツキーの並べる空文句の、まかせぶりをその根底からあばいているものといつてよい。

「ロシア革命の勝利における農民の役割をほんとうに理解しているものは、ブルジョアジーが尻ごみすると革命の展開力が弱まる、などと言えるはずがない。なぜなら、実際には、ブルジョアジーが尻ごみすると革命の展開、ロレタリアートとともに積極的革命家として進出するときにはじめて、ロシア革命のほんとうの展開がはじまるだろうからであり、そのときにはじめてそれは、ブルジョア民主主義変革の時代に可能な、真に最大の革命的展開となるであろうからである」（本論稿（十）、本誌第二十七巻第一号、八八―八九ページ参照、傍点およびゴシック体―山本）。

これらのレーニンの明確な指摘とトロツキーの事実歪曲・捏造の空文句とをつきあわしてみると、彼トロツキーがはじめから終りまで農民の革命的エネルギーをまったく無視していたこと、したがってその意味で終始一貫反レーニンの・反革命的見地にしがみついて離れようとしなかったものであることが、動かしがたく明るみに出てくるのである。

(ロ) 「農民なしには、あるいは、農民に対抗しては、プロレタリアートは革命を最後までおしすすめることができなかったから、ポリシェヴィキは、革命の綱領を、何百万の農民の利益にかぎったのだ」という主張も、おどろくべき事実の歪曲と捏造であり、ポリシェヴィキ・レーニン党のうちたてた綱領そのものになりたいする破廉恥きわまる中傷である。そればかりではない。ここには第一に、民主主義革命とはどういうものであるかという根本的な、本質的問題についての、トロツキーの完全な無知と曲解が明瞭に示されており、そのうえ――第二に――、農民を革命的民衆の根幹部隊と

して認めることがまったくできず、農民および小ブルジョア階級をひっくるめてすべて保守的・反動的性格のものとしてきめているトロツキーの反革命的見解がむきだしに示されている。しかも、おどろいたことに、こうした反マルクス主義的・反革命的見解をそのままポリシェヴィキにおしつけて、ポリシェヴィキもそうした見解によって農民にたいする「特別の」配慮から綱領の内容をさだめ、同じ「政治的」配慮から、当面の革命の性格をことさら「ブルジョア民主主義革命」と名づけているのだ、と強弁しているのである。この二つの問題、つまり、「ブルジョア民主主義革命」ということの意味内容と、農民の革命的役割とは、当面もとも中心的な意義をもつものであり、同じ序文のなかでトロツキーは、しばしば右と同じような曲解、歪曲、捏造および破廉恥なおしつけをくりかえしやつのけているので、——行論において同じ説明をくりかえすことを省く意味もかねて——いまここで、これら二つの問題についてレーニンがさきの『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』のなかで明瞭に説明しているところを摘記し、これと直接つきあわせてみることにしよう。

まず第一の「ロシア革命のブルジョア民主主義的性格」の問題について。レーニンは右の労作のいたるところでこの問題にふれているが、そのなかでもっともまとまった説明があたえられているひとつの箇所は、その「六 プロレタリアートが不徹底なブルジョア階級と闘争するさいに手をしばられる危険は、どの方面から迫ってくるか？」のなかに見いだされる。ここについては、すでに前稿（九）のなかでとりあげたが、なおトロツキーの主張との根本的相違を、というよりは、トロツキーによる全面的改ざんと歪曲のほどを、疑問の余地なくうきぼりの示す便宜をかんがえて、とくにこの問題にかんする説明部分の主要なものを、つぎに再現することにしよう（文中、「」をつけて挿入した部分は、山本の注記を示す。なお……は中略部分）。

「マルクス主義は、ロシア革命のブルジョア的性格を無条件に確信している。これはなにを意味するか？ それは、ロシアにとって必要となっている、政治制度の民主主義的改革と社会『經濟上の改革が、それ自体としては、資本主義を掘りくずし、ブルジョアジーの支配を掘りくずすことを意味しないばかりでなく、逆に、資本主義の広範で急速な發展、アジア的でないヨーロッパ的な發展の地盤をはじめて本格的に掃きよめ、階級としてのブルジョアジーの支配をはじめて可能にすることを意味している。社会革命派は、この思想を理解することができない」「トロツキーも同じく、まったく理解できない」。なぜなら、彼らは、商品生産および資本主義的生産の發展法則のイロハを知らない」「トロツキーも同じく知らない」からであり、また彼らは、農民蜂起が完全に勝利し、農民の利益のため、農民の希望に応じてすべての土地が再分配される（『黒い割替』またはなにかそれに類する措置）ばあいですら、それは資本主義をけつして廢絶するものではなく、むしろ反対に資本主義の發展に刺激をあたえ、農民自身の階級分化を促進することを、見ないからである。この真理を理解しないことが、社会革命派を小ブルジョアジーの無意識的イデオログにしているのである。この真理をあくまで主張することは、社会民主党にとって、理論的にだけでなく、実践的・政治的にも、大きな意義をもっている。というのは、現在の「一般民主主義」運動でプロレタリアートの党が完全な階級的独自性をまもらなければならないという義務が、そこから生まれてくるからである。

しかし、このことから、民主主義的變革（その社会『經濟的内容からいえばブルジョア的な變革）は、プロレタリアートにとってひじょうに大きな利益にならない、という結論はけつして出てこない。またこのことから、民主主義的變革は、主として大資本家や大金融家や「開明した」地主に有利な形態でおこりうるし、また農民と労働者に有利な形態でもおこりうる、ということを否定する結論はけつして出てこない。



新イスクラ派は、「ブルジョア革命」というカテゴリーの意味と意義とを、根本的に誤って理解している。「トロツキーも同じように根本的に誤って理解している」。彼らの議論からつねにうかがわれるのは、ブルジョア革命とは、ブルジョアジーに有利なものだけしかもたらさない革命である、という思想である。ところが、このような思想ほど誤ったものはない。ブルジョア革命とは、ブルジョア的な、すなわち資本主義的な社会に経済体制をこえない革命である。ブルジョア革命は、資本主義の発展の諸要求を表現しているものであって、資本主義の基礎を廃絶しないどころか、むしろ反対に、それをひろげ、ふかめる。だから、この革命は、労働者階級の利益だけでなく、全ブルジョアジーの利益をも表現している。資本主義のもとでは労働者階級にたいするブルジョアジーの支配は避けられないから、ブルジョア革命はプロレタリアートの利益よりもむしろブルジョアジーの利益を表現している、と言うのはまったく正当である。しかし、ブルジョア革命はプロレタリアートの利益を全然表現しないという思想（「トロツキーがその胸のうちにしまっている根本思想」）は、まったくばかげたものである。……………この思想は、理論的には、商品生産の基礎のうえでは資本主義の発展は避けられない、というマルクス主義のイロハともいうべき命題を忘れることである。……………

これらのマルクス主義の命題はみな、一般的にも、またとくにロシアについても、きわめて詳しく証明されており、噛んでふくめるようにくりかえし述べられている。ところで、これらの命題からは、いやしくも資本主義のいっその発展以外のものに労働者階級の救済をもとめようという思想は反動的である、という結論がでてくる。ロシアのよくな国では、労働者階級は、資本主義のためになるしんでいるよりも、むしろ資本主義の発展の不足のためになるしんでいる。だから労働者階級は、資本主義のもっとも広範な、もっとも自由な、もっとも急速な発展を、無条件の利益と

している。資本主義の広範な、自由な、急速な發展を妨げている、旧時代のすべての残存物をとりのぞくことは、労働者階級にとって無条件に有利である。ブルジョア革命とは、旧時代の残存物、農奴制の残存物（専制だけでなく、君主制もこうした残存物の一つである）をもつとも決定的に一掃するような、資本主義のもつとも広範な、自由な、急速な發展をもつとも完全に保証するような、まさにそういう変革なのである。

だから、ブルジョア革命は、プロレタリアートにとって極度に有利である。ブルジョア革命は、プロレタリアートの利益にとって無条件に必要である。ブルジョア革命が、完全で、断固たるものであればあるだけ、それが徹底したものであればあるだけ、社会主義のためのプロレタリアートのブルジョアジーにたいする闘争は、それだけですす保障されたものとなるであろう。科学的社会主義のイロハを知らない連中「まさにトロツキーと同じ無知な手合」だけが、この結論を目あたらしいもの、または奇妙なものとおもうのである。ところで、この結論からは、とりわけ、またつぎの命題、すなわち、ある意味においてブルジョア革命は、ブルジョアジーよりもプロレタリアートにとってより有利である、という命題が出てくる。この命題は、まさしくつぎのような意味で、すなわち、ブルジョアジーにとっては、プロレタリアートに対抗して旧時代の若干の残存物、たとえば、君主制や常備軍等によりかかったほうが有利であるという意味で、疑う余地がない。……………ブルジョアジーにとっては、ブルジョア民主主義的な方向での必要な改革が、より緩慢に、徐々に、慎重に、よりぐずぐずしたやり方で、革命の道ではなく改良の道によって、おこなわれるほうが、これらの改革が、農奴制の「尊敬すべき」機関（君主制のような）にたいしてできるだけより慎重であるほうが、これらの改革が庶民すなわち農民ととくに労働者の革命的な自主性、創意および精力をできるだけより少なく發展させるほうが、より有利である。というのは、さもないければ、労働者にとって、フ

フランス人の言うように、「銃を一方の肩から他方の肩にのせかえる」こと、すなわち、ブルジョア革命が彼らに供給する武器、この武器があたえる自由、農奴制を一掃した基盤のうえに発生する民主主義的諸制度を、ブルジョアジーそのものにたいして向けることが、それだけたやすくなるからである。

これに反して、労働者階級にとっては、ブルジョア民主主義的な方向での必要な改革が、まさに改良の道をたどらず革命の道をたどっておこなわれるほうが、有利である。なぜなら、改良の道は、ぐずぐずして長びかせる道であり、国民という有機体のくさった部分が苦痛をともないながら徐々に死滅していく道だからである。この部分がくさっていくためにまっさきに、もっともひどく苦しむものは、プロレタリアートと農民である。……………

……………資本主義社会における階級としてのブルジョアジーの地位そのものが、不可避免的に民主主義的変革におけるブルジョアジーの不徹底さを生みだす。階級としてのプロレタリアートの地位そのものが、プロレタリアートを徹底した民主主義者とならせる。……………ブルジョア革命が徹底したものであればあるほど、革命は、民主主義的変革におけるプロレタリアートと農民の利益をそれだけ多く保障する。

マルクス主義は、プロレタリアにたいして、ブルジョア革命から遠ざかれとも、これに参加するなども、その指導権をブルジョアジーにあたえよとも、教えていない。反対に、マルクス主義は、ブルジョア革命にもっとも精力的に参加せよ、徹底したプロレタリア民主主義のために、革命を最後まで遂行するために、もっとも断固として闘争せよ、と教えている。われわれは、ロシア革命のブルジョア民主主義的な枠からとび出すことはできないが、この枠を大いにひろげることはできる。われわれは、この枠のなかで、プロレタリアートの利益のため、その直接の必要のため、また将来の完全な勝利にそなえてプロレタリアートの勢力を訓練する条件をつくるために、たたかうことができ

るし、またたかわなければならない」（前出、三二—三六ページ、傍点—レーニン、ゴシック体—山本）。

『民主主義的変革は、ブルジョア的なものである。黒い割替、または土地と自由というスローガン——うちのめされ、無知ではあるが、熱烈に光明と幸福をもとめている農民大衆の、このもつともひろくゆきわたっているスローガンは、ブルジョア的なものである。しかし、われわれマルクス主義者は、ブルジョアの自由とブルジョアの進歩の道以外には、プロレタリアートと農民を真の自由へ導く道はないし、またありえないことを、知らなければならない。

われわれは、現在のところ完全な政治的自由、民主的共和制、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁以外には、社会主義に近づく手段はないしまたありえないことを忘れてはならない。われわれは、先進的な、唯一の革命的な階級、なんの保留もせず、なんの疑いもいдаかず、なんらうしろをふりかえることのない革命的階級の代表者として、民主主義的変革の諸任務を、できるだけひろく、大胆に、また率先して、全人民のまえに提起しなければならない。これらの任務を低める「トロツキーが始めから終りまでやっているように」ことは、理論的にはマルクス主義の戯画であり、その俗物的歪曲であり、また実践的・政治的には、革命の徹底した遂行からかならず尻ごみするブルジョアジーの手に革命の事業を引き渡すことである」（前出、九二—九三ページ、ゴシック体—山本）。

ここに明記されているのは、ロシア第一次革命についての、そしてまたこの革命をいかにたたかいたかという前衛党の任務についての、レーニンによる明確な規定であり、また、それは、ボリシェヴィキ党の基本的見地および根本的態度を示したものである。ここに明示されてあることを、「ボリシェヴィズム」についてのさきのトロツキーの説明と、どうかとくくらべてみていただきたい。両者のあいだに、いったい、共通なもの、もしくはすこしでも似かよったものがあるだろうか？ いや、まったくない。それら両者は似ても似つかぬものであり、正確にいうなら

ば、トロツキーの説明は、レーニンの明示しているところをことごとくゆがめ、きずつけ、これを真赤なせものにすりかえてしまっているといえなければならない。このことは、いったい、どういうことをわれわれに示しているものであるか？ それは、トロツキーが、レーニンの見地、考え方がまったくわからず、つねにこれを俗物的な煽動政治屋の見地からゆがめてうけとっている、ということを示すものにほかならない。いま、このことをすこしちいって考えてみよう。

レーニンは、どうして、当面のロシア革命の性格を、プロレタリア社会主義革命ではなく、まさにブルジョア民主主義革命と規定したのであるか？ それは、ほかでもない、レーニンがマルクス主義の基本内容をなす科学的経済理論を完全に把握し、商品生産および資本主義的生産の発展法則を確実にとらえてこれをロシアの現実にたたく適用して、階級構成および階級闘争の具体的内容を的確に把握したからであり、これによって政治制度の民主主義的改革と社会・経済上の改革こそが当面の社会発展にとってのさしせまった課題となつてゐることを的確にとらえたからである。資本主義のもっとも広範な、もっとも自由な、もっとも急速な発展をおさえている旧時代の残存物、勤労人民を政治・経済的に抑圧している農奴制の残存物を、もっとも決定的に一掃する変革——それが、まさしくブルジョア民主主義革命であり、これこそが社会主義をめざすプロレタリア革命にはじめて道を拓くものである。では、トロツキーはどうか？ かれは、これまで見てきたように、マルクス主義の基本内容をなす科学的経済理論はまったく理解しておらず、したがって商品生産および資本主義的生産の発展法則などといったことはこれっぽっちも知らず、そのために、なぜ、政治制度の民主主義的改革と社会・経済上の改革が当面のさしせまった課題となつてゐるかは全然わからないし、またこの課題の重大性に気がつくことすらしていない。このことは、かれが、その自慢するこ

の小冊子のなかで農奴制の完全な一掃、共和制の樹立をとりあげることすら忘れてしまっているという、たったひとつの事実によって、うたがう余地なく裏書きされている。

では、レーニンは、なぜ革命の主力をプロレタリアートにかぎらないで、農民階級という、もう一つのブルジョア民主主義的勢力をもこれに加えているのか？ それは、レーニンが、ロシアの政治經濟の現状についてマルクス主義の立場から正確かつ厳密に分析を加え、ここから当面の变革の性格を明確にブルジョア民主主義革命と規定したからであり、この革命を遂行する勢力としては、革命的人民勢力がその主力とならなければならず、またこの革命的人民勢力のみがよくこの变革をなしとげる唯一の勢力であることを、的確につきとめたからである。革命的人民勢力とは、プロレタリアートと農民（都市と農村の小ブルジョア階級を総称して）にほかならない。<sup>(126)</sup> トロツキーは、ロシアの政治經濟の現状について分析を加える能力もなければ、またそのことの意味もわからず、煽動政治屋の俗物的感覺をたよりに当面の革命の狙いはただだ——馬鹿のひとつ覚え式に——プロレタリア独裁の達成にあるものと思ひこみ、したがって、人民勢力は当然その視野から脱落し、農民の革命的役割は完全に忘れ去られてしまっているのは、当然であるといつてよい。

(126) プロレタリアートと農民とが革命的人民勢力を成すからといって、これら両者が、同じ比重をもち、対等の立場にあって主体勢力を構成しているものということはできない。マルクス主義の基礎理論を正確に把握した者にとつて、プロレタリアートだけが最後まで革命的な、そして社会主義建設の主導的な勢力となりうる階級であるといふことは、いまだ議論をまたない。さきに本論稿（十）のなかでみたように、レーニンは、「人民」のうちで、「プロレタリアートだけが確実に最後まですむことができる」と述べ、農民については、「農民のなかには、大量のプロレタリア分子とならんで小ブルジョア分子もふくまれている。このことが農民をも動搖的にし、プロレタリアートが厳密に階級的な党に結束しなければならぬようにする。し

かし、農民の動揺性は、ブルジョアジーの動揺性とは根本的にちがっている。というのは、農民は、現在では、私的所有を無条件に擁護することよりも、むしろこの所有の主要な形態の一つである地主の土地をとりあげることに利益を感じているからである。農民はそれだからといって社会主義的になりはしないし、小ブルジョア的でなくなりはしないが、民主主義の急進的な味方となることができる。農民は、もし彼らを啓蒙する革命的事件の進行が、ブルジョアジーの裏切りとプロレタリアートの敗北によって、あまりに早く中絶するようなことさえなければ、かならずそうなるであろう。農民は、以上のような条件があるなら、かならず革命と共和制の砦になるであろう」と説明している（本論稿（十）、本誌第二十七巻第一号、八七—八八ページ参照）。

右に明示されているような、プロレタリアートと農民とのあいだの本質的差異からして、「プロレタリアートが唯一の徹底した革命的先進的階級として、中間的な階級の中途半端性、不決断にわずらわされずに、それだけ大きな精力と、それだけ大きな熱情をもって、全人民の事業のため全人民の先頭に立って最後まで闘争しなければならない」ということ、および、そのためには、この先進的階級はそれ自身のうちに特別の前衛部隊が、すなわち、別個の、自立した、厳密に階級的な前衛党が不可欠であるということが出てくるのであり、またとりわけ大切なことは、プロレタリアートが農民を革命的自覚に引きあげ、これを自分の完全な階級的自立性をまもっているプロレタリアートの徹底した民主主義の水準に、革命的水準に引きあげ、民主主義的変革の諸任務をその前に提起し、農民の攻撃を指導することである。そして、これらのことがすべて、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁というスローガンのなかにふくまれ、またそれによって示されているのである。

第二の問題としてさきにかかげた「農民の革命的階級としての役割」については、第一の問題との関連においてとりあげられているところをいろいろみてきたので、いまここにあらためて論ずるまでもないようにおもわれる。しかし、農民階級を革命的人民勢力のなかからおいだし、これを無視するという、トロツキーのきわだった反革命理論がどんなにレーニンの革命的マルクス主義の見地と真つ向うから対立するものであるかということをはっきりとらえておくために、なおレーニンの前記著作から関連した個所をひとつ引いておくことにしよう。つぎにあげるのは、さき

に本稿の注（126）のなかで引いた部分にすぐつづいて述べられているものである（念のため、さきの引用の最後の文章をもう一度はじめに引いておこう）。

「農民は、以上のような条件があるなら、かならず革命と共和制の砦となるであろう。なぜなら、完全に勝利した革命だけが、土地改革の面ですべてのものを農民にあたえることができるであろうし、農民がのぞんでおり、夢みているもの、また半農奴制の泥沼から、虐待と隷属の暗黒から立ちあがり、商品経済の限界内でゆるされるかぎりの生活条件の改善をおこなうために「社会革命派」が想像しているように資本主義を廃絶するためではなく、農民がほんとうに必要としているものすべてを農民にあたえることができるであろうからである。

それだけではない。徹底的な農業改革だけでなく、農民のいっさいの一般的、恒常的な利害もまた、農民を革命にむすびつける。農民は、プロレタリアートと闘争するのにさえ民主主義を必要とする。なぜなら、民主主義体制だけが、農民の利害を正確に表現し、大衆としての、多数者としての農民に優勢をあたえることができるからである。農民は、啓蒙されればされるほど……、それだけ一貫して、断固として、完全な民主主義的変革を支持するようになるであろう。なぜなら、人民の主権は、農民には、ブルジョアジーに恐ろしいように恐ろしいものではなく、むしろ有利だからである。農民が素朴な君主主義から解放されはじめるやいなや、民主的共和制がかれらの理想となるであろう。なぜなら、プロローカー商売をやるブルジョアジーの意識的君主制（上院その他をとまう）は、農民にとって、ヨーロッパふうの憲法ですこしばかり上塗りをしただけの、以前のままの無権利状態、以前のままの虐待と暗黒を意味するからである。

それだからこそ、ブルジョアジーは、階級としては、当然に、不可避的に、自由主義的君主主義政党的翼のもとに



はいろいろとつとめ、農民は、大衆としては、革命的・共和主義的政党的指導のもとにはいろいろとするのである。だからこそ、ブルジョアジーは民主主義革命を最後まで遂行することができないが、農民は革命を最後まで遂行できるのであって、われわれはこの点で、全力をあげて農民を援助しなければならないのである。

そんなことを証明するにはおよばない、そんなことはイロハだ、そんなことは社会民主主義者ならだれでもよくわかっていて、と言って反論するものがあるかもしれない「トロツキーもかならず反論するにきまっている」。そうではない。ブルジョアジーが革命から脱落すると革命の「展開力が弱まる」「とか、農民勢力をひきつけておくために、農民の利益を綱領に盛る必要があり、したがって当面の革命をさしあたりブルジョア民主主義革命としておく必要がある、とか」などという人間は、それがわかっていないのだ。こういう人々「もちろん トロツキーをふくめて」は、われわれの農業綱領から暗記した文句はくりかえしていても、その意義がわかっていないのである。というのは、もしわかっていれば、かれらは、マルクス主義的世界観全体とわれわれの綱領とから不可避的に生まれてくる、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁の概念をおそれ「たり、トロツキーのようにこれを無視したりし」ないであらうし、またロシア大革命の展開力をブルジョアジーの展開力にかぎるようなことはしないだろうからである。そういう人々「もちろん、トロツキーはその代表的人物のひとり」は、自分の抽象的なマルクス主義的で革命的な空文句を自分の具体的反マルクス主義的で反革命的な決議でうちこわしているのである。

ロシア革命の勝利における農民の役割をほんとうに理解しているものは、ブルジョアジーが尻ごみすると革命の展開力が弱まる、「または、そうならないためにブルジョア革命ではなくて、すぐさまプロレタリア社会主義革命を遂行すべきである」などと言えるはずがない。なぜなら、実際には、ブルジョアジーが尻ごみしてしまい、農民大衆が

プロレタリアートとともに積極的革命家として進出するときにはじめて、ロシア革命のほんとうの展開「口先きだけの『社会主義的』展開などではない」がはじまるだろうからであり、そのときにはじめてそれはブルジョア民主主義的変革の時代「けっしてプロレタリア革命の時代ではない」に可能な、真に最大の革命的展開となるだろうからである。わが国の民主主義革命が徹底して最後まで遂行されるためには、それはブルジョアジーの不可避免的な不徹底性を麻痺させることのできるような……勢力に依拠しなければならない。

プロレタリアートは、強力で専制の抵抗をおしつぶし、ブルジョアジーの動揺性を麻痺させるために、農民大衆を味方にひきつけて民主主義的変革を最後まで遂行しなければならない」（前出、七八―八二ページ、傍点―レーニン、ゴシツク体―山本）。

ごらんのように、レーニンは、革命的人民勢力の基本的要素として農民を規定し、農民が「積極的革命家」として進出するときにはじめて民主主義革命が徹底して遂行されうると述べ、右の末尾にみられるような有名な命題をかかげている。これは、言いかえれば、当面の革命「人民革命を徹底的にたたかぬくための唯一の正しい革命的スローガンは、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁以外にはけっしてありえない、ということを明らかにしているものといつてよい。ところが、トロツキーは、終始一貫あくまでも農民を革命的人民勢力の不可欠の基本要素だとはみとめず、そのためにまた、レーニンおよびボリシェヴィキ党が唯一の正しいものとしてかかげているプロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁のスローガンをば、まったく無意味なもの、非現実的なものだとしてこれを鼻の先きであしらい、こうしたスローガンは農民をいわば「釣る」ための「一時的策略」としてしか意味がないといつて、これを徹頭徹尾歪曲し——なんと、一九〇四年から一九一九年にいたるまで終始一貫して——けんめいに攻撃

をくわえているのである。こうした臆面もない反、ボリシェヴィキ、反レーニンの俗物的煽動政治屋が、その序文のなかで、いけしゃあしゃあと、自分自身のことを、りっぱな「ボリシェヴィキ」であり、「マルクスの弟子」であるなどと、並べたてているのである!!

ブルジョア民主主義革命の意義および「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁」のスローガンの意義と内容については、さらに行論においてふれることとし、ここではつぎに、「序文」のうちの右につづく部分、つまり、トロツキーが自分自身について述べている個所について、その内容を検討してみることにしよう。客観的・歴史的事実についての彼の説明がどんなにでたらめであり、歪曲と改ざんの積み重ねであるかはこれまでのところでもよくわかったが、しかし、自分自身のこととなると、彼の筆「ペロ」の走りは格段にすばらしいものとなる。それはむしろ、底知れない邪悪の意図と野心とをたくみにそのなかにつつみかくしている、色とりどりの巧妙・悪辣なうそ、すりかえ、ペテンから成る創作的モザイクとして、未来永劫までその名をとどめずにはおかぬ傑作だ、といつてよい。

四 まず、「当時著者は、革命の内的な諸力の評価とその展望にかんしては、ロシアの労働運動の主要な傾向のどちらにもついていなかった」とか、「亡命期間中、著者は、この二つの党派の外側に立っていた」とか書きたてているのは、真っ赤なうそであり、きわめて悪質な事実すりかえである。このことは、動かすことのできない歴史的事実を並べて見るということとをただけでも、掌を指すように、明白である。

1 一九〇三年第二回党大会でイスクラ少数派が分裂策動をしてメンシェヴィキをつくったとき、レーニンに後足で砂をひっかけて、「親密な戦友」マルトフの胸の中にとびこんだのは、ほかならぬトロツキーそのひとである。

2 一九〇四年、世紀的傑作の小品、『われわれの政治的任務』を書きおろして、これをメンシェヴィキの総本山『新イスクラ』の編集で出版し、そのなかで、「經濟主義者と社会民主主義者との闘争の時期について、これを乱暴に歪曲する」という手腕を示し、レーニンを感じさせたつぎの一連の名文句——「旧『イスクラ』と新『イスクラ』とのあいだには深淵がある、第二回大会はサークル的闘争方法を定着させようとする反動的な試みであった、旧『イスクラ』にはプロレタリアートのことなどどうでもよかったのだ、イスクラ派『ボリシェヴィキはプロレタリアートを馬鹿者だといっている」——を書いて、ボリシェヴィキ罵倒の大言壮語をかがげ、あわせて同時に、「新『イスクラ』の新しい戦術的任務、新しい戦術的見解を全世界に鳴物入りで吹聴する」という手のこんだ芸当をやってみせ、かくしてめでたくもブルジョア自由主義派の大立物、ベ・ベ・ストルューヴェ先生から、「この小冊子には、多くの個所ではらをふいているという特徴があるが、しかしそれは、社会主義文献に興味をいだくものが、すでにアキモフ、マルティノフ、クリチエフスキー、その他の諸氏のいわゆる「經濟主義者」の著作によってよく知っている、若干の思想をまったく正当にも擁護している」という、まさに的を射た評価と超絶讃の祝辞をたんまり頂戴し、とどのつまり、レーニンそのひとから、新『イスクラ』の「編集局のバラライキン」という、適切このうえもない異名を授けられる名誉に浴したのは、誰あろう、トロツキーそのひとである。

(127) 本論稿（七）、本誌第二十六卷第二号、一二五ページ参照。

(128) 本論稿（七）、前出、一五五ページ参照。

(129) 本論稿（七）、前出、一五七ページ参照。

3 一九一〇年、ドイツ社会民主党の機関誌『ノイエ・ツァイト』に、ことさら『ロシア社会民主主義派の發展諸傾向』と題する世紀的大論説を発表し、そのなかで、ボリシェヴィキとメンシェヴィキの双方にたいして、それらは

「プロレタリアートの階級運動へのマルクス主義的インテリゲンツィアの適応によって生じたもの」<sup>(130)</sup>であり、両者ともに「マルクス主義の根本的諸問題において一致している同意見」<sup>(131)</sup>の「マルクス主義的インテリゲンツィア」でつくった「政治的に未熟なプロレタリアートにたいする影響力を獲得するため」の「閉鎖的な団体、秘密の党サークルの独裁的組織」<sup>(132)</sup>にすぎず、「先進的な労働者をしめだして、自分たちだけで理論的な定式や政治的なスローガンをでっちあげてこれを労働者におしつける」<sup>(133)</sup>ものだからさまに記し、とくにポリシェヴィキにたいしては、「セクト的精神、インテリの個人主義、イデオロギー的物神崇拜を党の中にもちこみ、マルクス主義を歪曲した」<sup>(134)</sup>ものであって、「本来的に原始的な党組織を原理にまでまつりあげ、プロレタリアートの政治的未成熟のうちに、労働者階級がマルクス主義インテリゲンツィア、つまりポリシェヴィキによってもっとも合目的に指導される理由を見つける」<sup>(135)</sup>ような連中であり、とくに「ボイコットの傾向、つまり、大衆への「同化」にたいするセクト的恐怖の産物、「和解できない禁欲！」の急進主義、を濃密にもっている」<sup>(136)</sup>もの、「大衆組織、階級的任務、労働者民主主義」<sup>(137)</sup>に強硬に反対する「陰謀者」<sup>(138)</sup>の分派にすぎないものとして、その熱誠あふれる打倒ポリシェヴィキの旗印を全世界にむかって大々的に宣明したのは、ほかならぬわがトロツキー先生そのひとである。

- (130) 本論稿(一)、本誌第二十四卷第四号、一八ページ参照。
- (131) 本論稿(一)、前出、二七ページ参照。
- (132) 本論稿(一)、前出、一九ページ参照。
- (133) 本論稿(一)、前出、二七ページ参照。
- (134) 本論稿(一)、前出、二九ページ参照。
- (135) 本論稿(一)、前出、一七ページ参照。
- (136) 本論稿(一)、前出、一九ページ参照。

（137） 本論稿（一）、前出、二五ページ参照。

（138） 本論稿（一）、前出、二七、二八および二四ページ参照。

（139） 本論稿（一）、前出、二四ページ参照。

ところが、この世紀的大論説の内容は、かえって、トロツキーの主張そのものが、レーニン・ボリシェヴィキに敵対し、またレーニン・ボリシェヴィキによって徹底的に論破され粉砕されたところのさまざまな反革命的路線、すなわち、經濟主義、メンシェヴィズム、日和見主義・追隨主義、解党主義、等々をすべて寄せあつめて成った、典型的な俗物的反ボリシェヴィキ論の雑炊にほかならないという「事実」を裏書きしているのであつて、これらの実体については、すでにこれまでの検討によってほぼ明らかにされたところであり、また今後の究明によつていよいよ動かしがたく明瞭に示されるはずである。それゆえ、一九一〇年の時点において、トロツキーのかかげた旗印の基調は、俗物的解党主義というべきもの、といえるであらう。しかし、以上では、一九〇四年から一九一〇年までの間トロツキーがどんなすばらしい「見地」をまもっていたかがわからないので、正確を期するために、右のトロツキーの得意とする自家宣伝大論説にたいして、真実のマルクス主義的批判の鉄槌をくだして、その野望をこっぱみじんのうちくだいた当のレーニンの労作、『ロシアにおける党内闘争の歴史的意味』（一九一〇年）の結論部分をつぎにかかげて、その間の真実をとらえるよすがとすることにしよう。（「」内は山本の注記）。

「今日われわれは、マルトフを解党主義の指導者の一人で、しかも彼がえせマルクス主義的な言葉で解党派を「たくみに」擁護していればいるほど、いっそう危険な一人である、と考えている。だが、マルトフは公然とその見解を述べており、この見解は、一九〇三—一九一〇年の大衆的労働運動の幾多の潮流にそれ自身の痕跡をのこしている。とこ

ろが、トロツキーはただ彼自身の個人的な動揺を代表しているだけで、それ以上のものはなにも代表していない。彼は、一九〇三年にはメンシェヴィキであった。一九〇四年にはメンシェヴィズムから離れ、一九〇五年にはただ超革命的な空文句をひけらかすだけで、メンシェヴィキにかえった。一九〇六年にはふたたびそれを去った。一九〇六年にはカデット「これは札つきの自由主義的ブルジョア民主主義派である」との選挙協定を擁護し（つまり事実上はふたたびメンシェヴィキといっしょになり）、一九〇七年の春にはロンドン大会で、彼とローザ・ルクセンブルグとの相違は「政治的傾向の相違というよりはむしろ個人的色合いの相違」である、とかたつた。トロツキーは、きょうは一つの分派の思想的貯えから、あすは他の分派の思想的貯えから剽窃し、それゆえに自分は両分派をこえたところに立っていると宣言する。トロツキーは、理論のうえでは、解党流や召還派にどの点でも同意していないが、実践においてはすべての点で、ゴース派に同意している。

だから、もしトロツキーがドイツの同志たちに、自分は「全党的傾向」を代表しているとかたるなら、わたしは、トロツキーは自分の分派だけを代表しているにすぎず、ただ召還派や解党派のあいだでだけいくら信頼をえているにすぎない、と声明しなければならぬ。つぎにかかげるのは、わたしの声明の正しさを証明する事実である。一九一〇年一月、わが党の中央委員会は、トロツキーの新聞『プラウダ』と緊密な結びつきをうちたて、その編集局に中央委員会の代表を任命した。一九一〇年九月、トロツキーが反党的政策をとつたため、中央委員会の代表がトロツキーと関係を断つたということが、党中央機関紙にのつた。コペンハーゲンで、党維持派のメンシェヴィキの代表者で中央機関紙編集局の代議員であったブレハーノフは、ポリシェヴィキの代表としての本論文の筆者やポーランドの一同志といっしょに、トロツキーがドイツの出版物でわが党の問題をえがきあらわしているやり方にたいし、断固たる

抗議を声明したのである。

トロツキーがロシア社会民主党内の「全党的」傾向を代表するものであるか、それとも「全反党的」傾向を代表するものであるかは、いまや読者諸君の判断にまかせよう」（全集第四版、第十六巻、三六〇ページ、傍点—レーニン、ゴシツク体—山本）。

みられるとおり、レーニンは、トロツキーがことさら外国党の機関誌に大々的に発表した大論説のかくれたやましい意図と野望をこっぱみじんに粉砕し、彼トロツキーがもともとメンシェヴィキであり、つねにメンシェヴィキと「ついたり、はなれたり」しながら、しかも自由主義的ブルジョア民主主義派とも手を結んだりして、つねにいろいろの分派から「思想」を無断借用して俗物的雑炊をこねあげ、自分はすべての分派の上にあると宣伝してまわるような骨の髄からの煽動政治屋であり、しかも、真正正銘の解党派と密接な連絡を——組織的にも、思想的にも——たもつてつねに反党的政策を陰険におしすすめている、もつとも悪質な反党的、反ポリシェヴィキ的ベテン師であることを、動かすことのできない歴史的事実の数々をあげて、実証しているのである。これを要するに、彼トロツキーは、一九〇三年から一九一〇年まで、おしもおされぬ、れつきとしたメンシェヴィキであり、解党主義者であり、反党的、反ポリシェヴィキ徒党の一方の旗頭であつたのである。

(140) トロツキーの悪辣なポリシェヴィキ誹謗の大論説を徹底的に粉砕するためにレーニンが書いた、この論文『ロシアにおける党内闘争の歴史的意义』の内容については、行論において、さらにたちいった検討を加えることにしたいとおもう。

なお、トロツキーは、ポリシェヴィキ誹謗の大論説をドイツ社会民主党の機関誌『ノイエ・ツァイト』に発表するだけでは十分効果的でないと考えて、つぎのような卑劣な手までつかつてゐる。それは、右の大論説とまったく同様の趣旨の小論を、同じドイツ社会民主党の機関紙『フォアヴェルツ』の一九一〇年八月二十三日付紙上に、『ロシア社会民主主義派（本紙



のロシア通信員より』という表題で——なんと匿名をもつて——發表しているのである。しかも、さらに性こりもなく、一九一二年三月二十六日付同紙上にも、『ロシアの党内生活から』という小論を——これもまた匿名で——發表して、ボリシェヴィキ誹謗のあがきをしつようにくりかえしているのである。これら二つの小論を読めば、彼トロツキーがいかに下劣で醜惡な野心的煽動政治屋であるかということが、さらにいっそう身にしみてわかるのであつて、これら二つの小論の概要については、いづれ行論において——未だ邦訳がないので——拙訳によって、読者にお伝えすることにしよう。

4 一九一四年においても、トロツキーは相も変わらず執拗にボリシェヴィキ攻撃と解党主義宣伝をくりかえしている。このトロツキーの攻撃の矢をはねかえして、ボリシェヴィキ党を守り、トロツキーの野望をくじくと同時に、トロツキーの分裂主義的・解党主義的俗物性をこのうえもなく的確にあげ、論証しているのは、レーニンのすぐれた論文、『統一の叫びに、かくれた統一の破壊について』（一九一四年五月）である。このレーニンの論文は、いわゆる「トロツキズム」の性格を明確にとらえるうえで欠くことのできない重要な参考文献であるばかりでなく、彼トロツキーのもっとも得意とする「永続革命論」なるものの実体をとらえるうえにとつても数々の貴重な示唆をふくんでいる。したがつて、その内容については、必要なかぎり十分な吟味がなされねばならないが、それらはすべて行論にゆずることとし、ここでは、レーニンがその中で強調している一篇文章——「われわれがトロツキーのことを『分派性の最悪の遺物』の代表者と呼んだのは正しかった」（全集第四版、第二十卷、三〇六ページ、ゴシック体——山本）——と、その最後の一節をかかげるにとどめておこう。

「ロシアのマルクス主義運動の古くからの参加者は、トロツキーの人物をよく知っているので、彼らにそれを話してやるまでのこともない。しかし、労働者の若い世代は、それを知らないから、話さなければならぬ。なぜなら、それは、事実上解党派と党とのあいだを同じように動揺している五つの在外グループのすべてにとつて典型的な人物だ

からである。

旧『イスクラ』の時代（一九〇一—一九〇三年）には、經濟主義者から「イスクラ派」へ、またその逆へと動揺し鞍替えするもののために、「トゥーシノの渡り者」（ルーシの動乱時代には、一つの陣営から他の陣営にはいった軍人がこう呼ばれた）というあだ名があった。

われわれが解党主義を論じるときには、われわれは、幾年ものあいだに成長し、その根はマルクス主義の二〇年の歴史のなかで「メンシェヴィズム」と「經濟主義」とに結びつき、自由主義ブルジョアジーという特定の階級の政策とイデオロギーに結びついた、一定の思想的潮流をはっきりさせているのである。

「トゥーシノの渡り者」は、彼らが今日はある分派の思想を、明日は別の分派の思想を「借用している」ということを唯一の根拠として自分らは分派よりも高いところにいるのだと称している。トロツキーは、一九〇一—一九〇三年には熱烈な「イスクラ派」であつて、リャザノフは、一九〇三年の大会でのトロツキーの役割を「レーニンの棍棒」の役割と呼んだものであつた。一九〇三年末には、トロツキーは熱烈なメンシェヴィキであつた、すなわち、イスクラ派から「經濟主義者」のほうに鞍替えしたのである。彼は、「旧『イスクラ』と新『イスクラ』とのあいだには深淵がある」と宣言した。一九〇四—一九〇五年には、彼はメンシェヴィキから離れ、あるいはマルトイノフ（「經濟主義者」と協働し、あるいはばかしく左翼的な「永続革命」を唱えて動揺的立場をとつた。一九〇六—一九〇七年には、彼はポリシェヴィキに近づき、一九〇七年春には、自分はローザ・ルクセンブルグと同じ考えだと声明した。

分解の時期には、長い「非分派的な」動揺のあとで、彼はふたたび右に走り、一九一二年の夏には、解党派とプロ

ックを結んだ。いまやふたたび解党派をはなれつつあるが、しかし実質上は、彼らの思想をくりかえしている。

こうしたタイプは、ロシアの大衆の労働運動がまだ眠っており、どんなグループにとっても自分が一個の流派、グループ、分派であるかのように――一言でいえば、他のそれらと統一について話しあう「強国」であるようなふりをするのが「自由」であつた過ぎし日に歴史的に形成され構成されたものの残骸として特徴的である。

一九〇八年いらい解党主義にたいする態度を規定し確立した党の諸決定をも、それらの決定の完全な承認を基礎として、実際に多数者の統一をつくりだしたロシアの現在の労働運動の経験をも、絶対に顧慮しようとしていない人々が、信じられないほど過大な要求をかかけてきているいま、労働者の若い世代に、自分の相手にしているのは誰であるかをよく知らせるようになる必要がある」(前出、三二―三三ページ、傍点―レーニン、ゴシツク体―山本)。

5 さらに一九一五年、トロツキーは、メンシェヴィキの議員団であるチヘイゼ派議員団と密接に結びつき、ボリシェヴィキに敵対する解党派とメンシェヴィキとの共同闘争を強化しようといふけんめいに奔走している。この当時の涙ぐましいばかりの反ボリシェヴィキ活動のありさまをうかがい知るために、さきに本論稿(一)の中に引用したレーニンの労作、『社会主義と戦争(戦争にたいするロシア社会民主労働党の態度)』(一九一五年)の第四章の最後の節「ロシア社会民主党の現状」の中の該当部分を抜粋してかかげることにしよう。

「すでに述べたように、解党派も、幾多の在外グループ(ブレハーノフのグループ、アレクシンスキーのグループ、トロツキーのグループ、など)も、いわゆる「非ロシア民族的」(つまり大ロシア人以外の)社会民主主義者も、一九一二年のわが党の一月協議会をまとめた。われわれにあげられた数しれない罵言のうちでいちばん頻繁にくりかえされたのは、「篡奪主義」と「分裂主義」という非難であつた。これにたいするわれわれの答は、わが党こ

それがロシアの自覚した労働者の五分の四を統合していることを証明する、正確な、客観的に点検できる数字をあげることであった。反革命期の非法法活動のあらゆる困難のもとでは、この数字はすくないものではない。……………

わが党とたたかう社会民主主義グループの歴史は、すべてが崩壊と解体の歴史である。一九一二年三月には、われわれにたいする悪口の点で、もれなくすべてのものが「統合」した。ところが、はやくも一九一二年八月、われわれに対抗していわゆる「八月ブロック」がつくられたときには、すでに彼らのあいだでは解体がはじまった。……………彼らは党と中央委員会をつくることができなかった。彼らは、「統一を回復するために」組織委員会をつくったにすぎない。だが、実際には、この組織委員会は、ロシア国内の解党派グループの無力なくれみのにすぎなかった。一九一二年——一九一四年のロシアの労働運動の大きな高まりと大衆的ストライキとの全期間を通じて、八月ブロック全体のうちで、大衆のなかで活動していた唯一のグループは、やはり『ナーシャ・ザリヤー』のグループであつたが、このグループの力は、自由主義者との結びつきにあつた。そして、一九一四年初めには、「八月ブロック」からラトヴィアの社会民主主義者が正式に脱退し、このブロックの指導者の一人であるトロツキーは、非公式にこのブロックから出て、またもや独自のグループをつくった。……………『ナーシャ・ザリヤー』、プレハーノフ、アレクシンスキー、カフカーズの社会民主主義者の指導者アンは、公然たる社会排外主義者となつて、ドイツの敗北が望ましいと説いている。組織委員会とブンドは、社会排外主義者と社会排外主義の原則とを弁護している。チヘイゼ派議員団は、軍事公債には反対投票したとはいえ（ロシアではブルジョア民主主義者のトルドヴィキでさえ、それには反対投票した）、依然として『ナーシャ・ザリヤー』の忠実な同盟者である。わが国の極端な排外主義者であるプレハーノフ、アレクシンスキーの一派は、チヘイゼ派議員団にまったく満足している。パリで、『ナーシャ・ザリヤー』、組織委員会、あるい

はチヘイゼ派議員団との統一を無条件に要求することと、国際主義のプラトニツクな擁護とを両立させようとのぞんでいる、マルトフとトロツキーを主要な参加者として、新聞『ナーシエ・スローヴォ』が創刊された。この新聞も第二五〇号を発行したのは、自己の解体をみとめないわけにはいかなかった。……トロツキーは組織委員会とは手を切ると言明したが、チヘイゼ派議員団とは行動をともしたいとおもっている」(本論稿(一)、本誌第二十四巻第四号、一一—一三ページ参照、傍点およびゴシック体—山本)。

ごらんのように、トロツキーは、ブルジョア自由主義派との「統一」を主張し、解党派を極力援助して「組織委員会」をでっちあげ、終始社会排外主義者「メンシエヴィキと緊密に連携をたもち、これらのメンシエヴィキといつしよになつて一九一四年九月から一九一五年一月までパリで「ゴロス」紙を発行し、つづいて、同じく排外主義者「メンシエヴィキと解党派とブルジョア自由主義派との「統一」を要求して、一九〇三年いらいの盟友、メンシエヴィキの親方、マルトフと力をあわせて、またぞろ新聞『ナーシエ・スローヴォ』を亡命先きのパリで発行し、あくまでもメンシエヴィキの支援、強化とポリシエヴィキ打倒のために、まさに粉骨碎身の奮闘を執拗にくりかえしつつけているのである。この骨の髄からの反、ポリシエヴィキ親、メンシエヴィキの煽動政治屋が、なんと、レーニンにまんまととりいつてポリシエヴィキの一指導者に成りあがつた一九一九年には、自分は「その当時、ロシアの労働運動の主要な潮流のどちらにもくつついてはいなかった」とか、「亡命期間中、著者は、この二つの党派の外側に立っていたので(!!)、ポリシエヴィキとメンシエヴィキとの間の不一致の線にそつて(!!)、現実(!!)、一方の側に不屈の革命家たち(!!)があつまり、他方の側に、たえずますます日和見主義的になり、調和主義的になつていく諸分子(!!)があつまっていたという、きわめて重要な状況(!!)を十分に(!!)評価しなかった(!!)」(前出、(!!)——山本)などと、書きたてているのである!!

6 トロツキーが一九〇三年いらいのもっとも親密な戦友である札つきのメンシェヴィク・マルトフと共同参加した『ナーシェ・スローヴォ』において、トロツキーは、マルトフとならんでその事実上の主筆となり、一九一六年九月まで、その紙上でレーニン派・ボリシェヴィキにたいする非難・攻撃を精力的に展開しつつけた。わが「トゥーシノの渡り者」先生の反ボリシェヴィキ宣伝のうたい文句としていつでもこの新聞を飾った迷調子のお手本を、つきにお目にかけよう。

「政治的行動の諸問題を組織的境界設定の問題のもとに従属させること、彼らの政綱の基本原則を拒否する者にたいしても、彼らのセクト的綱領のあらゆる些細なことに叩頭しない者にたいしても、同じように敵対的態度をとること。このグループがよりよく組織されているということは、自身を隔離しておこうという、彼らの傾向に完全に相応しているのである」(『ナーシェ・スローヴォ』、一九一五年十一月二十四日号に所載の論説、『客観主義の時代のもと』<sup>(141)</sup>「Тод впрочем объективизма」)。

(141) これは「International Institut voor Sociale Geschiedenis, Amsterdam. で発行された『International review of social history』, Vol. XIV—1969—Part 2. に載せられた資料 (Document) J. T. Rossum の小説『トロツキーの一九一六年初の未発表の手紙』(「Ein unveröffentlichter Brief Trotskij's von Anfang 1916」)のなかで引用されているトロツキーの文章である (a. a. O., S. 253)。この手紙は、一九一六年初に、トロツキーが、オランダの婦人社会主義者 Henriette Roland Holst に宛てて書き送ったものであるが、そのなかにはいわゆる「トロツキズム」の性格を判断するうえで欠くことのできない重要な意味をもった個所がすくなく見いだされる、その全文は近く行論において訳出してかけられる予定であるが、つぎの7にあげられているのも、それからのひとつの抜粋である。

7 一九一六年初におけるトロツキーのレーニンおよびボリシェヴィキにたいする怨恨、中傷および非難・攻撃がどんなにひどいものであったかは、オランダの婦人社会主義者、ヘンリエット・ロランド・ホルストの発行する機関誌『フォルボータ』(「Vorbote, Internationale Marxistische Rundschau」)——『先駆、国際マルクス主義評論』への

編集参加の勧誘にたいして答えたトロツキーの手紙のなかに示されている、つぎのあからさまな「拒絶」の弁によっても、よくうかがわれる。

「わたしは貴女から『フォルボーテ』に協力するようという、あらたな緊急のお招きをいただき、そして、ほとんど同じ日にこの雑誌の第一号を受け取りました。しかし、わたしは、この雑誌そのものと、貴女がその手紙のなかでこの雑誌にあたえている性格描写とのあいだに、ひじょうな違いがあることにびっくりしないではいられませんでした。貴女は、革命派Ⅱ国際主義的分子がひとりのこらずそれに協力しなければならぬ連合の雑誌について書いていますが、そのさい、貴女はつぎのようなグループを挙げています、——レーニンのグループ、『ナシエ・スローヴォ』のグループ、左翼のフランス人のグループ、等々。ところが他方、『フォルボーテ』は、いわゆるツインメルワルド左派、つまりレーニンのグループの機関誌となっています。レーニンの決議の草案が、雑誌の基本的政綱の形で印刷され、その冒頭の論説のなかでは、この雑誌はほかならぬツインメルワルド左派の決議から出発するということが声明されています。同時に、最初の号のなかで、協力者としての役割をあたえられているのは、貴女自身をのぞいては、レーニン派ばかりです。いったい、これはどういうことでしょうか？

なによりもまず、——事柄の原則的な側面について。この雑誌は、その思想的貧困によって、すべての批判的な読者を驚かさずにはいません。ツインメルワルド会議では、わたしはそのとき、レーニンが若干のきわめて重大な問題にたいして、最高度に十分な表現をあたえていると個人的に言明しましたが、それでも貴女といっしょに、レーニンの決議草案を委員会に付託することに賛成投票することができました。だが、そこでは、政治的な闘争同盟が、行動が問題であったのです。しかし、ここでは、雑誌が、批判と宣伝の機関誌が問題なのです。そこでは、直接に政治的な効果のために、社会急進主義のもっとも幼稚な俗流化の精神でつくられた文書に条件づきで承認をあたえることができたとしても、そのような性質の文書を雑誌の政綱にするということは、理論、政治および……文学的趣味にたいする犯罪であります」(a. a. O. S. 256—257. 傍点およびゴシック体—トロツキー)。

「……………わたしは、そのような機関誌がその周囲に、ドイツおよびフランスの労働運動界の重要な諸勢力を結集することができると思いません。わたしは、当地ではツィンメルワルド左派のバンフレットにたいして人がどんな輕蔑をもって対しているかということをあまりにもよく知っていて、それについては疑いをいれる余地はありません。レーニン派は、ドイツにも、フランスにも、イギリスにも同意見の者を持っていない——そして、わたしの意見によれば、持つことができない——ということ、貴女は最後まで忘れてはなりません。ロシアの過激主義者とオランダの過激主義者とが一緒になっても、インターナショナルを創りだすことはできません。オランダの過激主義は固定した小ブルの環境の産物ですし、ロシアの過激主義は、プロレタリアートの最初の歴史的運動が当然に理論と政治の単純化と俗流化を要求するような、そういう無定形で野蠻な社会的環境の産物であります。ひとは、ロシアとオランダの過激主義者が、ドイツ語の雑誌を発行することによって、左翼分子の頭を通じて労働者を組織する能力があることが実証されることを、つまり、純粹にレーニンのユートピアにおちいることを期待しています。雑誌を出版することは、ドイツとフランスの一定のグループと協定を結び、そして、雑誌のなかで革命的『社会主義的傾向の宣伝をする權利をあらかじめ自分に確保したときにだけ、可能であったでしょう。けれども、貴女は、まったく別の途をとりました。貴女は、雑誌をレーニン派の連中に引き渡し、彼らは、彼らの持ち前のあらゆる厚かましきでこの雑誌を利用し、そして、他の人々にたいしてこの企てに加わるように説得しています。……………」(a. a. O., S. 257—258, ゴシック体—山本)。

みられるように、トロツキーは、レーニンおよびレーニン派『ボリシェヴィキ』にたいして、これ以上考えられないような露骨な惡罵をあげせかけている。——「思想的貧困」「社会急進主義のもっとも幼稚な俗流化」からはじまって、なんと、「レーニン派『ボリシェヴィキ』は、ドイツにも、フランスにも、イギリスにも、ひとりも支持者、同調者をもっていないし、またもつことはとうていできない」とか、「ボリシェヴィズム『ロシアの過激主義は、無定形で野蠻な社会的環境の産物である』と



か、「レーニンのユートピア」とか、「レーニン派」ボリシェヴィキの持ち前のあらゆる厚かましき」とか、等々。

さて、以上1から7にいたるまで、ここにあげられたわずかな歴史的事実に照らしてみても、トロツキーが、一九〇三年から一九一六年まで、十四年もの長いあいだ終始一貫、レーニンとレーニンの率いるボリシェヴィキに執拗に反対し、つねにこれに敵対する分派——経済主義者からはじまって、メンシェヴィキ、ブルジョア自由主義派、解党派、社会排外主義者、等々——に加盟または加担し、ありとあらゆる分裂・破壊活動を策し、可能なかぎりの出版物——外国友党の機関紙、雑誌から、彼自身のひきいる分派の機関紙、雑誌まで——を動員して醜悪・下劣なデマ、虚構、でっちあげからありとあらゆる悪罵までを精力的に書きつらねて、「最後まで」レーニンとボリシェヴィキの打倒のために文字どおり狂奔これつとめていたものだということは、完全に明白である。ところが、この悪辣・陰險な野心的煽動政治屋は、一九一七年八月レーニンにたくみにとりいつてまんまとものにした党指導層の一員としての権力をかさにきて意図的に再版した旧著に例によって例のごとき序文をつけ、そのなかで、「ロシア労働運動の主要な潮流のどちらにもくっついていなかった」とか、「亡命期間中、著者は、この二つの党派の外側に立っていた」とか、まったくありもしないう、そ、を、書、い、て、、レーニンとボリシェヴィキの攻撃・打倒に狂奔していたという歴史的事実をぬりつぶしてしまうばかりでなく、なんとあきれたことに、この著書を書いた一九〇四年当時から自分はりっぱにマルクス主義を身につけたマルクス主義者であって、そのマルクス主義理論を正確に適用してつくりあげたのがこの著書の中に展開されている「永続革命論」であり、この「永続革命論」こそは一九一七年いろいろのボリシェヴィキ党がとってきた方針とぴったり一致したものであるのだ、と書きたてているのである。この醜悪・下劣な「トゥーシノの渡り者」がありもしない事実無根の自家宣伝を、どんなに言葉たくみに、それこそ空文句の羅列で、まんまと読者にのみこませてしま

おうとしているかということをも、どうかとくと玩味していただきたい。

「現在、この書の再版を公けにすることによって、著者は、多くの年月のあいだポリシェヴィキ党の外部にいた(!!)自分自身と仲間たちが、一九一七年のはじめにあたって、ポリシェヴィキ党の運命に自らの運命を結びつける(!!)ことを可能にした(!!)理論的諸原則を説明することを欲するだけでなく(このような個人的な理由(!!)はこの書の再版にとつての十分な理由となるまい)、また、プロレタリア独裁が既成の事実となるずっと前に(!!)、労働者階級による政治権力の掌握がロシア革命の任務でありえし、またそうあらねばならないという結論がそこから導きだされたところの、ロシア革命の原動力についての社会的・歴史的分析(!!)を呼びもとしたいと思う。一九〇六年に書かれ、その基本的な構想はすでに一九〇四年に形成されていたこの小著を、現在変更を加えることなくふたたび出版しうる(!!)という事実(!!)は、マルクス主義理論が(!!)ブルジョア民主主義の代理者たるメンシェヴィキの側にあるのではなく、労働者階級の独裁を実際に推進している党の側にあることの完全な証拠である(!!)。

理論の最終的な検証は、経験である(!!)。われわれがマルクス主義理論を正確に適用した(!!)ということを示す論駁しがたい証拠(!!)は、われわれが現在関与している諸事件が、そして、それらへのわれわれの関与の仕方そのものさえもが、基本的な点では(!!)すでに十五年も前に予見されていた(!!)という事実によって与えられている(!!)」（本誌本号、七〇ページ、(!!)——山本）。

「マルクスの弟子であるわれわれ(!!)は、ドイツの労働者とともに、革命の春は社会的自然の諸法則(!!)に完全に一致して、そしてまた同時にマルクス主義理論の諸法則(!!)に一致して到来した(!!)のだという、われわれの確信(!!)をまもる(!!)。なぜなら、マルクス主義は、歴史を超越した学校教師の指針ではなくて、現実に進捗しつつある歴史的過程の道と方法についての社会的分析である(!!)からである。

わたしは、二つの著作——一九〇六年と一九一五年との——をいかなる変更もくわえずに(!!)出版する。もともとわたしは、原著に若干の注をつけて(!!)これを時勢にあったもの(!!)にするつもりでいた。しかし、原著を通読してみても、わたしは、この意図を

断念しなければならなかった。もしわたしが細部にまで立ちいろうとすれば、この書物の大きさを倍にしなければならなかったであろう。しかし、そのためには今のところ時間がないし、そしてそのうえ、そのような「二階建」の本(!!)は、読者にとって決して便利とはいえないであろう。そして、より重要なことだが、わたしは、この思想のつながりがその主要な分脈において、現在の諸条件にひじょうによく接近しているし、この本をより完全に理解しようと欲する読者は、現在の革命の経験からとりだされた必要な材料をもって、この本の説明を補足する(!!)ことが容易にできるであろう、と考えるのである」(本誌本号、七〇―七二ページ、(!!)―山本)。

ごらんのように、彼トロツキーは、厚顔無恥にも、自分は「マルクスの弟子」であり、十五年もむかしからりっぱに「マルクス主義理論を正確に適用し」、「ロシア革命の原動力についての社会的・歴史的分析」をすでに完璧にはたしているのであって、一九一七年になってポリシェヴィキ党が現実をやったことはみな、彼トロツキーがとっくの昔に発見した「永続革命論」をそっくりそのまま真似ただけのものにすぎない、と書きたてている。それゆえ、彼トロツキーが、一九一九年になってわざわざ十五年前の旧著『革命の結果と展望』を再版する手数をとったのは、ロシアの黨員も非黨員もひっくりかえりて国民大衆がみな、「マルクス主義の理論」の偉大さ、これを「適用」したトロツキーの「社会的・歴史的分析」の正確さ、そしてトロツキーの抜群の先見の明について、よくよく肝に銘じておぼえておくようにとの、ありがたい「思し召し」に出たものでしかない、というわけである!! そして、そのありがたい「思し召し」がどんなに深いものであるかということは、彼トロツキーが、ご丁寧にもその「附録として」、一九一五年に『ナーシェ・スロークヴォ』に発表した札つきの論文、『権力のための闘争』をそえて、これを再版しているという一事によってもよくわかる。この小論『権力のための闘争』(!!)は、一九一〇年の例の世紀的大論説がレーニンによって完膚なきまでに批判・

粉碎されたのとまったく同様に、レーニンによってその反革命的・二股の実体を徹底的に暴露され、ものの美事に天<sup>(天)</sup>下<sup>(下)</sup>にその恥をさらす次第となった曰<sup>イ</sup>くつきの代物なのである!!

(142) これは、亡命先のバリーで『ナシシェ・スロヴォ』(一九一五年十月十七日付)に載ったものである。前出英訳書では、この小論は、論文『結果と展望』の末尾に、その第十章として、訳出されている。この小論が、「トウーシノの渡り者」に固有の、これまで明らかにしてきた諸「性格」をどんなに裏付けるものであるかということについては、いずれ行論でふれることにしよう。

(143) これについては、本論稿(十一)のなかで挙げられた「歴史的事実」の「3」についての説明を参照されたい(本誌本号九〇—九五ページ)。

(144) 一九〇八年いらいロシア社会民主労働党の中央機関紙として非合法に出されてきた『ソツィアル・デモクラート』は、解党主義を執拗に擁護する二人のメンシェヴィキ——トロツキーの「もっとも親密な戦友」マルトフとダン——をその編集局から退けて、一九一一年からボリシェヴィキ——レーニンによって編集されたが、その一九一五年十一月二十日号に、レーニンは、論文『革命の二つの方向について』を載せ、そのなかで、プレハーノフとトロツキーの俗物的觀念論に徹底的な批判を加えている。トロツキーにたいする批判は、いずれ行論においてふれるはずであるが、トロツキーがどんなにみにくことに「マルクス主義」を理解し、これをどんなに「正確に適用」しているかということを的確にとらえているレーニンの評言を少しだけ、つぎにかかげておこう。

「彼は、一九〇五年の彼の「独創的」な理論をくりかえして、どんな理由で、実生活がまる一〇年もこのすばらしい理論を素通りしてきたかを考えてみようとしなさい。

トロツキーの独創的な理論は、ボリシェヴィキからは、プロレタリアートの断固たる革命的闘争への呼びかけと、プロレタリアートによる政治権力の獲得への呼びかけをとり、メンシェヴィキからは、農民の役割の「否定」をとってきている。彼がいうには、農民は階級的にわかれ、分化した。農民の革命的役割の可能性は、ますます減退した。ロシアでは「国民」革命はありえない。「われわれは、帝国主義の時代に生きている」ところが「帝国主義は、ブルジョアの国民を旧制度に對置しないで、プロレタリアートをブルジョアの国民に對置させる」と。

これこそ、帝国主義という「言葉をもてあそぶ」こっけいな一例である！……」（全集第四版、第二十一巻、三八一—三八二ページ、ゴシック体―山本）。

さて、以上によって労作『結果と展望』の大体の輪郭とトロツキーの演じてきた歴史的活動の実績についてあらましのところをつかむことができたと考えられるので、つぎに、本労作の内容そのものについてたちいった吟味をくわえてみることにしよう。それによって、一九〇三年から一九一六年初めまで終始一貫、経済主義者、メンシェヴィキ、解党主義者と緊密に協力し、さてはブルジョア自由主義派を抱きこむことまでして、レーニン・ポリシェヴィキ打倒に狂奔してきたこの「バラライキン氏」が、その文学青年くずれの「文才」と稀代の「トゥーシノの渡り者」的資質とをいかなく発揮して、どんなにすばらしい「革命論」をつくりあげているかということも、とっくりと賞味することができようであらう。

（一九七三・五・一六）